農村ワーキングホリデーのいざない Ver.2

農村ワーキングホリデーとは

農業や農村に感心を持ち、田舎暮らしや農作業をしてみたいと希望する都市住民に、繁忙期で猫の手も借りたい地元農家が寝食を無償で提供する仕組みを指します。農家と共に農作業に汗を流し、農村でのありのままの生活を体験することが特徴です。農家との深い交流を特徴とする日本型グリーン・ツーリズムのなかでも、最も「鏡効果（交流による他者の目線を借りた気づき）」の高い形態で、受入農家が参加者から体験料を徴収する教育旅行（農家民泊）とは性格が異なります。

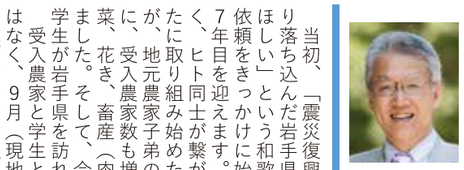
なお、農村ワーキングホリデーの先進地・長野県飯田市では、都市と農村の「パートナーシップ事業」として十数年前から取り組まれており、農村ワーキングホリデーへの参加を契機として、田舎暮らし志向のIターン者（移住者）や新規就農者が増加するなど農村再生に画期的な成果を挙げていることから、全国的に注目を集めている仕組みです。

和歌山大学と奥州（旧：胆江）農村ワーキングホリデー研究会との域学連携のあゆみ

時期	事　　項
2012.05	岩手県庁職員・農家との出会い／「事業（予算）ありき」ではない持続的な関係づくりに着手
2012.09	初めての農村ワーキングホリデー（以下、WHと略記）を実施（農家5戸と学生9名）
2012.12	受入農家8名が和歌山県訪問／地域間交流（秋津野ガルテン）／JA紀の里「めっけもん広場」訪問
2013.03	岩手県奥州市「農山村再生セミナー」開催（和大生，琉球大生参加）
2013.04	受入組織「胆江農村WH研究会」設立（episode:受入農家子弟が観光学部に入学！）
2013.09	和歌山大学から30名、協力大学から20名がWHに参加
2013.12	受入農家8名が和歌山県訪問／学生と再会／地域間交流（秋津野ガルテン）
2014.03	岩手県奥州市「農山村と都市の協働セミナー」開催（和大生，琉球大生参加）
2014.09	和歌山大学から36名、琉球大学から2名がWHに参加／期間前後での学生との交流拡大
2014.12	受入農家7名が和歌山県訪問／学生と再会／地域間交流（秋津野ガルテン）
2015.03	岩手県奥州市「農山村再生セミナー」開催（和大生，琉球大生，県立農大生，水沢農高生参加）
2015.09	和歌山大学から34名、琉球大学から1名がWHに参加
2015.12	受入農家9名が和歌山県訪問／学生と再会／地域間交流（秋津野ガルテン）
2016.03	岩手県奥州市「農山村再生セミナー」開催（和大生，琉球大生参加）
2016.09	和歌山大学から34名、琉球大学・岩手県立大学から計9名がWHに参加
2016.12	受入農家10名が和歌山県訪問／学生と再会／地域間交流（秋津野ガルテン）／湯浅醤油蔵訪問
2017.03	岩手県奥州市「農山村再生セミナー」開催（和大生，琉球大生参加）
2017.09	和歌山大学から28名、岩手大学・岩手県立大学から計3名がWHに参加
2017.12	受入農家10名が和歌山県訪問／学生と再会／JA紀の里「めっけもん広場」訪問／「高野山」視察
2018.03	岩手県奥州市「農山村再生セミナー」開催（和大生参加）／卒論・修論現地発表会開催

域学連携による農村ワーキングホリデーの意義

域学連携とは大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域住民とともに、地域課題の解決や地域づくりに取り組むことを指します。地域が大学と連携し、農村ワーキングホリデーを行うことで、農家間だけではなく、地域住民間での連携が生まれていきます。また地域を越えた連携も育まれ、現代社会で懸念されている人口減少によるコミュニティの希薄化を解消し、ネットワークを拡大していくことが特徴です。さらに、大学生と関わることで、今まで見えてこなかった新しい視点も得られます。域学連携では、次世代を担う大学生による「関係人口」の拡大にも繋がります。「関係人口」とは、言わば、地域の応援団です。応援団づくりをすることで、定期的に地域を訪れたり、将来的には移住したりする可能性を拓げます。



和歌山大学　観光学部
教授・学部長
藤田　武弘

当初、「震災復興予算を使って、風評被害により落ち込んだ岩手県の体験教育旅行を盛り返してほしい」という和歌山大学OBの県庁職員からの依頼をきっかけに始まった私たちの連携も、はや7年目を迎えます。「事業（予算）ありき」ではなく、ヒト同士が繋がる持続的な取り組みを」と新たに取り組み始めた農村ワーキングホリデーですが、地元農家子弟の和歌山大学観光学部入学を機に、受入農家数も増え、経営のタイプも稲作、野菜、花き、畜産（肉牛・酪農）など様々に拡がりました。そして、今では毎年30名余の和歌山大学生が岩手県を訪れるようになっています。

受入農家と学生との交流も「一過性」のものではなく、9月（現地での農村ワーキングホリデー実施）、12月（受入農家の和歌山研修で再会）、翌年3月（振り返りと普及・啓発を目的とした現地セミナーへの参加）といった一連の取り組みが継続しています。なかには、在学中に何度も農村ワーキングホリデーに参加し、卒業後もまるで「遠い親戚」のように受入農家のご家族と繋がっている学生や、農村ワーキングホリデーへの参加を機に農業関連部門での就職を志すようになった学生も少なくありません。さらに、交流の輪も拡がり、地元岩手大学や県立大学をはじめ、遠くは琉球大学からも学生たちが参加するようになりました。

毎年、新しいドラマが生まれる農村ワーキングホリデー。今年はどんな物語が紡ぎ出されることやら、今から楽しみでなりません。

受入農家の声

奥州市水沢区佐倉河
及川　裕子

受入から今年で6年目ですが、何年過ぎても「どんな学生さんが来るのだろうか？」「どのように接していったら良いのか…」。期待と不安は初めて受け入れた時と変わりません。自己紹介後はすぐに打ち解けて、奥州での農業の現状や自身の農業や食に対する思いを共に作業しながら会話し、地域内の友人宅の農作業を手伝って頂きますが、あっという間の農村ワーキングホリデーです。

受入農家同士も、地域を越えて出会いがあり、自分の得意とする農業や日常生活について話す機会ができたことは大きな喜びです。地域の人達が学生の話を聞くことや、地域活性化を専門とする先生達の話を聞いて、自分達の農業や地域に向き合う姿勢が少しでも前向きになってくれれば、という思いが年々高まってきています。農村ワーキングホリデーが無限に人のつながりや地域活性化の広がりをもたらしてくれるような気がしてなりません。

参加学生の声

和歌山大学大学院
観光学研究科　田村　澪

農村ワーキングホリデーは、農家の方々との交流の場というだけではなく、問題意識を持つことができる場でもあると思います。農業や農村でのありのままの生活を通して、農業や農村が抱える課題について当事者意識を持って学び、「自分が農家ならどう行動し、どのような支援を必要とするのか」など考えるようになりました。学生と農家の方をつなぐ学生事務局での活動を通じて、「地域について学生と一緒に考えたい」という農家の方々の思いがあるからこそ、この取り組みが持続して行われているのだと改めて実感しました。こうして深く関わるうちに何度も胆江地方を訪れたい、訪れようという気持ちが生まれます。私も胆江地方の「関係人口」として、これからも胆江地方の将来について一緒に考えていきたいです。

島根県中山間地域研究センター
企画情報部 地域研究スタッフ
研究員　貫田 理紗
（和歌山大学大学院 観光学研究科
平成２９年度修了）

私は学部2年生の時に初めて農村ワーキングホリデーに参加し、岩手の農業や農村での暮らし、何よりも受入農家の皆さんの虜になりました。農家の皆さんと汗を流し、食卓を囲み、農業で生活していく魅力、一方では厳しさを学び、また自身の大学の出来事や将来の夢など様々な話を聞いてもらいました。そういった経験が、私の場合は自身の修士論文や進路・選択にも影響し、地域に密接に関わる職業に就くことができました。自分を成長させて下さった皆さんに感謝の思いでいっぱいです。

岩手県立大学　総合政策学部
総合政策学科　3年 蔵谷 奏

私は岩手県出身で田舎暮らしは身近ですが、この活動に参加するまで農業についてあまり関心がありませんでした。しかし実際に参加してみると、農村の暮らしや農業についての知識や技術はもちろん、受入農家の方の愛情、岩手や若者に対する熱い思いなどを感じ、より一層故郷である岩手に貢献したいという思いが強くなりました。収穫した野菜や地元のお肉を農家の方直伝の調理法でいただくことができるのも魅力だと思います。

奥州市江刺区梁川
辻村 博夫・由起子

今年も農村ワーキングホリデーの学生さんがやってくる季節が近づいてきました。どんな出会いがあるのかな、と今からワクワクしています。

狭い日本といいながら、和歌山と岩手は、ずいぶん遠い。地図を見れば、和歌山から北へ550キロ、東へ700キロも離れたところに、わたしの住むムラがあるのです。関西と東北。歴史も風土も気候も作物もちがいます。でも、同じ人間、同じ日本人です。どこがちがって、どこが同じなのか。そんな観察をしてみるのも、若い人には、おもしろいと思います。

農村ワーキングホリデーの1日

畜産農家・Aさん宅の場合

6:00	起床
7:00	朝食
8:00	牛舎での ベッドメイキング
9:00	
10:00	
11:00	
12:00	
13:00	
14:00	昼食
15:00	ビニールハウスの 張り替え
16:00	
17:00	談笑
18:00	夕食
19:00	
20:00	入浴
21:00	就寝

稲作農家・Aさん宅の場合

5:00	起床
6:00	野菜の袋詰め
7:00	朝食づくり
8:00	朝食・出荷
9:00	野菜の播種
10:00	稲刈りのパレット掃除
11:00	
12:00	昼食
13:00	
14:00	稲刈り
15:00	
16:00	
17:00	
18:00	買物・夕食づくり
19:00	夕食・入浴など
20:00	
21:00	
22:00	
23:00	就寝

野菜農家・Mさん宅の場合

7:00	起床、朝食
8:00	作業準備
8:30	大根・白菜・ホウレンソウの追肥、小松菜の間引き
10:30	談笑・昼食づくり
11:00	
12:00	昼食・談笑
13:00	ミニトマトの収穫・袋詰め、産直売場に出荷
14:00	
15:00	ネギの収穫・袋詰め、小松菜の間引き・袋詰め、出荷、買い物
16:00	
17:00	
18:30	夕食づくり
19:00	夕食・談笑
20:30	
21:00	入浴、就寝準備
22:00	
23:00	就寝

研究者の目からみた農村ワーキングホリデーへの期待

農研機構東北農業研究センター
生産基盤研究領域 農業経営
グループ研究員 稲葉 修武
（和歌山大学 観光学部 平成28年度卒）

農村ワーキングホリデーは地域の応援団を増やす取り組みだと感じています。

2年前、私も学生としてこの取り組みに参加しました。研究職に就き、岩手県に配属されてからも、受入農家の方々は農業や農村の現場を教えてくれる先生のような存在で、今でも個人的に交流があります。

農村ワーキングホリデーの特徴である、農家のありのままのくらしを見ることが出来たことが自身の問題意識や地域への愛着につながっています。現時点で、お世話になった農家の方々や地域に何かお返しができたわけではありませんが、現場の人々が真に必要とする仕組みや技術は何かという視点を持ち続けたいと考えています。

卒業してからも交流を持ったり、受入農家の方のお米を購入したりするOG・OBがいます。参加した学生ひとりひとりの食や農に関する意識を改革し、地域の応援団を増やすことができる素晴らしい取り組みです。

○作成:和歌山大学観光学部・農山村再生ゼミナール（藤田武弘研究室）
〒640-8510 和歌山市栄谷930 TEL:073-457-8566／E-mail:tfujita@center.wakayama-u.ac.jp
○協力:岩手県南広域振興局農政部、奥州農村ワーキングホリデー研究会
○発行:2018年8月
○表紙題字:及川久仁江さん／パンフレットデザイン:浅井咲穂